

平成28年度「わたしと年金」エッセイ募集

ふるって応募ください



日本年金機構は、厚生労働省と協力して、11月を「ねんきん月間」と位置付け、国民の皆さまに年金制度に対する理解を深めていただくため、公的年金制度の普及や啓発活動を展開し、全国各地で年金出張相談などを開催しています。

この取組の一環として、広く皆さまから公的年金をテーマにしたエッセイを募集します。なお、受賞者には表彰状の授与並びに記念品を贈呈します。ふるってご応募ください。

詳しくは、日本年金機構ホームページをご覧ください。

応募者ご自身や身近な方と公的年金制度とのかかわりなど、「わたしと年金」をテーマにしたエッセイ。

※公的年金の大切さ、社会保障としての公的年金の意義など、公的年金に関するエピソードを盛り込んだ内容であれば、なんでも結構です。

【応募資格】

一般、学生・生徒（中学生以上）

【応募要領】

1. 郵便で、日本年金機構「わたし

と年金」担当宛に提出してください。(郵送のみの応募)

※日本語で1,000〜2,000文字以内。

※400字詰め原稿用紙の場合は3〜5枚、ワード文書形式による場合はA4版原稿(40字×35行)横書き1〜2頁程度。

※氏名、氏名ふりがな、年齢、性別、住所、電話番号、職業または所属(会社名、学校名等)を明記してください。

2. 内容は応募者本人が創作したもので、未発表のものに限りません。  
3. 応募作品は返却しません。

【応募締切】

平成28年9月5日(月)(当日消印有効)

【提出先・お問い合わせ先】

〒168-8505

東京都杉並区高井戸西3-5-24

日本年金機構 相談・サービス推進部 サービス推進グループ

「わたしと年金」担当まで

☎03-5344-1100

平成27年度作品 厚生労働大臣賞

栃木県 豊田 ひより 様

(高校生 女性)

私の父は、三十六歳の時、尿に血が混じっていることが分かり病気が発見され、通院や薬の投与をして生活していた。しかし、五十歳のときに、内シャント作成手術を行い、人工透析を開始した。まだ私が小学生のころだったのであまり記憶の中にはなく、当時のことはよく覚えていない。その透析の回数は年々増えていって、今では週に3回人工透析をするために通院し、夜遅くに帰ってくる。そのことについてはあまり多くのことは話さない。恐らく私たち子供たちにはあまり心配させたくないとの配慮から、大ごとのようには見せなかったのだと思う。しかし、たいへんなことで、つらいということは十分に伝わってくる。それを思うと、父の周りの人への思いやりには頭が下がる思いがする。父は、年金について興味も関心もなく、ただ「年金は定年退職をした高齢の方だけに支給されるもの」としか思っていなかった私に、自分が障害年金を受給していることについて教えてくれた。高齢者だけではなく、若者でも、保険料さえきちんと納めていれば、障害を持った時に年金をもらえることを知って、とても驚いた。

父は、人工透析をするようになってから関係する機関を三度訪れたそうだ。一度目にその場所で人工透析までの経緯を話し、身体障害者一級に認定された。二度目に訪れた時には医師の診断書を提出した。そして、三度目には書類を作成し、年金の支給について申請をし、それから半年後に年金支給決定通知が届き、年金がもらえるようになったそうだ。今回、私がこのことを年金エッセイとして書きたい、と父に言ったところ、了解してくれた。病気になるまで父は、毎日あたりまえのように会社に通勤していたが、通院のために早退したり欠勤をしたりすると、普通の人より給料が少なくなってしまうという問題が発生してしまう。しかし、年金を受給することができるおかげで、あたりまえの普通の生活を成り立たせることができている。この「あたりまえ」の生活ができることのうれしさは、どんなものにも変えられないと、年金が支給されるありがたさについて話してくれた。そして、この「あたりまえ」の生活を送るためには、普段から年金の保険料を納めておくことが大切なのだ、ということも父はしみじみと言っていた。私はこの年金の制度がなかったら、自分たちの生活に直接影響が出てしまい、年金の制度は大切なのだということを強く感じるようになった。若いうちや普段元気な時には、こういう気持ちをあまり持つことは少ないと思う。ただ何となく加入して、意識しないで保険料を納めているだけかもしれない。また、私は年金にも種類があることも今は知り、これまでよりも年金についての興味や関心を深めるようになってきた。高齢社会が到来し、今後の世の中の変わり方によっては、私が受給者になるころには、制度が変わるかもしれない。どのようになるかはわからないが、少なくとも、今回年金のことについて考えるとともに、これからの社会についても色々と考えていけるようにしていきたいと思っている。

今朝も、父は笑顔で「仕事に行ってくるよ」と忙しそうに会社にでかけていった。私も「行ってきます」と普段とおなじように学校に行った。これからも父にはこれまでどおりに仕事を続けていって欲しいし、私も自分の目標に向かって頑張って勉強や部活動に励んでいきたい。